

針葉樹會報

通卷第七十四號



大牟田印象記 (其の二)

近 藤

私はまだ大牟田の印象を書きつづらねばならない。朝六時各工場の汽笛が勇ましく鳴り響く。此の時は我輩は未だ安眠中である。眠つて居て聞える理もないだらう。誠に然りである、他人に聞いたのである、朝六時には必ず鳴るそうである。然して午前九時私は勇ましく出社する。ペンちゃん「我輩を送る言葉」に依るさ重役街道に一足踏み込んだのだそう、冗談も休みく云え！毎日く塵芥街道に足を踏み込んで居るんだぞ。先ず膝迄は乾いた土が飛上る。驚ろく可くして而も情けない風景である。大牟田の銀座通りは舗装してあるから此處丈は良いだらう、と云ふのが我々東京人の常識である。然らず、「チョット少し」ばかり然らずである。目も鼻も耳も口も、いやしくも凹んで居る處は必ず土塵が堆積する。大牟田には九州第一（土地での自稱）のデパートがある、「松屋」と號す。是が又大した代物である。此の松屋デパートが出来た爲め大牟田の若い年頃の娘は、是非此處で所謂職業婦人にならんものさ雲霞の如く押し寄せたそうである。是れが爲め市中は忽ち女中難、女中地獄を現出し、今日は隣、明日は向ひ家と女中が逃げて松屋に行つてしまふ。さあ、こうなるさ大變である。需要供給の經濟原則が此處に發動して女中の賃銀値上の強迫が始まり、遂に今日に至つては年百五十圓以下では絶対に女中に來て戴く事が出来ないさ云ふ有様である。昨近は満足に手足を揃へた女の子は必ず職業婦人になる可しと云つて居る。

斯くの如く大牟田のあらゆる女性を集めた麗人松屋はさぞかし美しき店であらう、美人雲の如く店内に充滿して居る。然し、と奴に物を云はせて見たら大低の關東人はやられてしまふよ、

パイ／＼のパツテン、ハケメンのペー

そして最後に「ソーノー」と來る。これでは全く手がつけられない、いやにな

つちやつたれ。

其の昔三池は重罪犯人を集めて地下の石炭を堀らし、坑口に強そうな者數名が刀を持つて我ん張り一方で石炭を堀らし一方で犯人を地下に押し込める、と云ふ一石二鳥の名案を實施した處だそう。地下監獄は考へたものだと思ふ。それから只石炭が出る丈で人口が増加した町だもの、殺風景なもの無理はない。

誰でも大牟田驛に下りて構外の廣場を見た時必ず何んとも云へない感じがする。木枯が吹き過ぎた野原に立つて居る様な氣持である。我々の感情を満足させる何物もないのである。

僕は近頃必ず大牟田市第一の處を聞いて買ひ物でも何んでもする事にして居る。寫眞屋も床屋も菓子屋も！是れでも東京で云ふと下高井戸邊より一寸おちるのだから大變なものである。壽司屋なんてものは全然話にもならない。下高井戸驛の前の壽司屋には到底及ばない。壽司は熱いものであると云ふ事が大牟田に来て初めて分つた、壽司で舌を焼いたなんて事は夢にも見なかつたね。

随分永い事大牟田の惡口を書いた。會員諸賢も以上で大低大牟田と云ふ處が如何なる處であるか認識された事であらう。

然しながら會社では決して惡口は云えない。大牟田に生れて大牟田の商業學校を卒業し、三井さん處に勤めて居ると云ふ大なる誇りに浸つて居る者が大部分である。

過日も東京本店から轉勤した同僚と事務所で惡口を云つて居た處、こんな良い處をそんなに惡く云はないでも良いではないかと云はんばかりに變な顔をして居た事務員があつた。住めば都であ

るわいをつくづく感ぢたが、江戸より下つた者はいくら住んでも駄目らしいね。

最後に大牟田を除いた九州は仲々良い處がある事を一言して置かう。其の第一は神社がさても立派である事である。これに感心した、どんな邊鄙な處でも神社丈は斷然立派でさても關東の比ではない。流石日本は九州より始まつたと云ふ感ぢがする、どの神社も何百年だ、つくづく歴史は古いと云ふ氣がする。先づこんな處で一時筆を擱く事にする。

以上

病室拾七號日記

柿原生

病室拾七號——詳しく言へば三百拾七號室入院の日記抄である。大腸カタルで入院凡二週間。その間筆を執れたのが四月廿一日からでした。僕も病氣になつて天井を眺めてゐるさ、戀しく思ふのはやはり北や南、それに秩父の山々でした。

○四月廿一日 針葉樹會報編輯の役目を増山さんから引繼いで一年、たゞ御座なりものばかり發行して了つたと言つた感が深い。

御多忙中筆を執つて下すつた會員諸兄や部員の一部の方に對しては厚い感謝の氣持で一杯である。編輯を初めた當時は、會報の性質から言つて別に依頼なしに原稿が集るのが當り前だと思つてゐた自分は、案に相違して原稿不足に驚いた。止むなく多忙のことは承知の助で無理に御願ひしても書いてもらふ段取りになる。そのため一部の方には全く無禮な位の態度をして原稿を戴いた。常連と言ふ言葉が出来るのは無理はなく、その爲に會報は發行し得たのである。

結局會報はこんな具合で毎號編輯されてゐた。日迫り月も終らむとして然も尙且つ原稿が集らない時のもどかしさは譬え様もない。そんな泣きごととも既に此の役目を離れた今の自分には、たゞ佳い後繼者をもつた安心で打ち消されてゐる。

扱次の編輯幹事望月君については茲に特に紹介する必要は毛頭ない。部報「針葉樹」の編輯正に三回に及んだ古豪なのだから、自分のだらしなさは棚に上げて、全く望月君に宜敷く御願ひしてしまつた小生は或は卑怯者かも知れない。

望月君には今度は全 厄介をかけてしまつた。會報四號の校正が來ても熱の高かつた自分はどうすることも出來ず、止むなく自分の責任範圍の最後の仕事であつたが是を全て同君に御頼みしてしまつた。

白い病室三百拾七號に横になつてゐる。會のことが縦横に頭の中を廻る。僕の會に對する仕事がかんなヒリオッドで一段落さば情ない次第だ。

○四月廿二日 想えば發病は四月十三日夜で風邪からだつた。四日も過ぎ食事に禍されて大腸カタル併發、四月廿日の入院なのである。一週間も寝てゐた上に、更に入院なのだから氣持の晴れざること地降り的小屋居に等しい。あ、いやだ！

病床に在り乍ら等しく又病床に在る森川のこそ、船本のことを心配してゐる。其後二人の脚の指はどうなつたか、元氣は出たらうかさ色々心配になる。

山登りが最終の目的なりと觀念しても、そうした態度の善惡は別として、一岩壁に對して生死の別も構はずに無暴な登攀を試む

ると言ふことは、決して正しい態度とは思えない。人生の最高目標を登山に置く云ふ森川の氣持は私にも能く判る。だからこそあの美しき山行の如くに此の世に生きねばならない、生くるべきである、自分等の生は要請してゐるのだ。山で死ねば本望だ云ふ様な態度は、人生を脱却して山岳の中にのみ自己のレーベンス・クライスを限つた人の言ふことであつて、此の世間に生き行かんとする建前からすれば山で死すことを本望とするなど云ふ言葉には、どうしても受け入れられないものがある。

午后になつて父上が訪れて下さつた。父は病室でしばらく語つて歸られた。地藏岳で遭難した節、韭崎の町へ周章て、尋ね來た日の父の事が頭に浮んだ。あの十一月初の澄み切つた秋の日の甲斐の山國を想ふ時、僕は常に心配顔の父が韭崎の宿屋に來た朝のことを忘れられないのである。

○四月廿三日 早朝母上來らる。お頼みして置いた島崎藤村の「夜明け前」二冊を持參して下さつた。

「夜明け前」を読み度いと考へてゐたことは久しい。木曾の山里のこそ、恵那山のこそ。木曾の山のことを讀むだけでも今の自分には何程嬉しい事が知れない。來る廿七日の夜汽車で黒菱の小舎へ赴かうとプランを決めてたのに、こんな有様になつて入院なのだから所詮あきらめる外はないのである。藤村の文を讀み木曾の山々の四季を想えば、興味盡くることなく山行の情濃かなるを覺える、藪原のこそ、更に和田峠のこそ、伊那の谷のこそ。藤村の言葉の寺の鐘が早朝の霧を破つて谷一杯に響くと言ふその谷の事を想ふと、體が全快しさえすればみる、もうコセ／＼働かないで

山に訪れ入るのだから、さ一人でベットのの上に力み返るのであつた。安曇の山々、秩父の山々が頭に浮ぶ。

○四月廿四日 目が覺めたのが六時十五分だ。枕頭の時計を見乍ら、平常此の位に早起き出来ればねと柄にもない殊勝な考。

相變らず寝たまゝ齒を磨き顔を洗ふ。するさ本朝のおつゝめたる腸洗と来る。肛門からゴム管を腸の中に入れるんだから氣持が悪い。凡そ病院なんて人間さモロモットとの區別は付かない位に非人間的ださ感心する。

○四月廿八日 父が再び來られた。土産に榮太樓の梅干飴を持參さる。おまけに僕の部屋にあつた山の寫眞額をも持つて來て飾つて呉れたのには言葉もなかつた。

それは地藏岳から眺めた甲斐駒と淺夜の寫眞だ。晩秋の日の夕方白雲が摩利支天のあたりを飛び、澄み渡つた甲斐の國の山深き寫眞だ。常日頃は山を危險視してゐる父も、愈屈な今の僕の心が山に在るを知つて此の寫眞を病室迄持參して下さつたのだらう。涙ぐましく嬉しかつた。

昨夜から全粥の食事、尙明日より腸洗中止となる。幾分人間界に近附いたれ。

○四月廿九日 今日天長節である。學校に居た頃はこんな時下界には居なかつた。尤も本來なら今年は此の休みに黒菱に行く譯だつたが。

「夜明け前」の二冊は昨夜讀み終つた。雜務で忙しい生活では一、五〇〇頁の大冊物を一週間で讀み切るのは困難だが、病氣の御蔭で本は讀める。木曾の谷の半藏の最後は哀れであり悲慘である。

僕は追分の驛の舊本陣のさびれ方を頭に描いて、嘗て思師幸田博士と田部重治氏等と共に過した、夏の日のことを想つた。淺間の灰の降る下に昔日の名残を止めてゐた舊本陣や油屋のこと、本陣の主人もあの頃は肺で寝てゐた。そして又油屋は其の後焼失してしまつたと聞く。舊街道の宿驛が亡び行くのは信州の追分でも、木曾の馬籠でも變りはないと見える。ただ淺間が常に灰を降すのも變りなく惠那山は冬に雪を戴く。自然の悠久なるに比すればまこと人生はあはたゞしき一瞬の稻妻にしか過ぎない。

今日初めて病室を出て徒歩で病院の廊下を歩く。歩くことは望ましいことだし喜びである。丈夫になつたら枋本から十文字、甲武信を訪れ度い。六月初旬には可能だらう。

後記―編輯役辭任の御挨拶旁々日記帳より引抜いて病中の有様右迄。目下は元氣なんです。

關西支部家族大會之記

(出席者) 松木謙三氏、同松子夫人、同溪子嬢、同岑一君、森健二氏、岡田謙三氏、同禧彌子夫人、同重正君、黒田正治氏、同通子夫人、小谷部全助氏。

四月二十四日午前十時阪急六甲驛集合。若か所が多いのに獨り者の寡いこちらの會員、女房小供は伊達にはもたぬと許り松木御大の音頭で賑々しく家族大會を行ふ事とは相成つた次第。集ひ寄つた右の面々、薄曇の空の下にバツと咲出した花の様。パス、ケ―ブルの連續で海拔六百餘米の六甲山には談笑の裡に來て了ふ。ドン・ホースケ兩カツブルの見られぬのは當にした誰彼に些か淋

しかつたが關西支部でこれ丈集れば、まあ上乘と云ふ所か。山上遊覽バスに乗込むと窓外に大阪灣を隔て、四國、紀州の山々を一目に見渡し乍ら無邪氣な會話が取かはされる。皆が皆一家和合の法悦にひたり乍ら居る中に一人あはれを止めしは今度皿利マン初年兵で來阪したスケ君。かうあてつけては若いものに毒なのにな、高山植物園前で下車、岡田氏御案内にて一同三菱の山上別荘へ繰込んで各自持參のお辨當をひろげる。坊ちゃん嬢ちゃんのお食慾恐るべきものあり、殊に溪子ちゃんのお食べる事。大人は大人でかたまつて四方山の雜談に打興じて、しばし時も、そして又奥さんさへも忘れた様。窓外には何時の間にか霧さへ流れて來て信州あたりの高原氣分をかもし出すあたり、六甲て山も仲々芝居氣がある。かくては果てじ別荘を辭去した頃は雲霧霽れて快い春陽がボカ／＼と照し始めたので皆でブラ／＼山上漫步しつゝ、戻る事に決める。岡田の重正君至極大人しいが松木岑ちゃんも早くもお駄々をこねて仲々皆と一緒に來ない。又溪子ちゃんは先刻の飲み過の爲か途々しきりにオシッコをして皆を笑はせる。かくてなごやかなる山上の歡を十分に盡した後再び六甲驛へ舞下つた頃はもう四時を少し廻つた時分で、後は銘々お互にお楽しみさ云ふ事にして解散。スケ君は今日のおてられ代を取戻すべく三角親分に後の身柄を預ける事になつて萬事旨く納つた次第。

エヴェレストには果して

固有なる西藏名ありや

(二)

K 生

エヴェレスト附近の住民の内にそれを Chomolung 或は Cho-

モン molong と云つてゐる人々のある事も事實であります。此等の人々はこの名稱の由來を知りません、そしてチャンパが云つた様に Chomo はチャモよりも口からの出方はすすき早いのであります。而も人々は Chomo Lhari とか Chomo Yummo 等の山名を知つて居る關係上チヨモが一般的でしかも舌は容易しい言葉の方へ走り易いといふ事もあるのであります。然し總ての人は本や紙に書かれた名稱が正しいものである事を認めて居ります。

然らば文書の上の名稱は如何なるものでありませうか。前記の如くドライ・ラマはその紙片の中に Chamolung を使用して居り彼の秘書も西藏王の歴史の中で同じ綴り方がされてゐる由を知らせて呉れました。

扱て最後に残るものは西藏政府が各エヴェレスト遠征隊に與へた入國許可證であります、それは現在ロンドンの王立地學協會に保存せられてあるものであります。私はその原本を仔細に研究し數ヶ月前までは寫眞に撮つた寫しを持つて居りました。此の證書の中でその名稱が出て來る場合必ず Chomo ではなく Chamo であつた事を瞭り記憶して居ります。シッキムの政治的事務官が之等の證書によつて作つた英語の音譯には Cho となつてゐて Cha ではありません、然し西藏の寫本を讀み得る人には之が誤りである事は明らかであります。其處では Cha と讀まれ Cho とは讀まれません。何となれば、この相違のみならず Cha といふのは鳥の意味で Pya と書かれ、Cho は君主の意味で Cho ン書かれます。文字が全然違ふのであります。

Chamolung を Chomolung とする誤譯に關する同様な例は西

藏語には度々見られる現象であります。譬へば人名たる *Song Tsen Gampo* は *Khenpo* と誤った發音をされてゐます。ケンポは僧院長を意味します。然しソン・ツェンはさうではありません。神性ある *Chenrezi* の一化身ではありますが彼は俗人であつて僧侶ではなかつたのであります。教育をうけた西藏人でケンポを正しい名稱である主張する人はありません。總ての萬年雪が年月を経たりといふ理由のみより神聖視されるものならばエヴェレストも其れ以上には出でないものであらうと思ひますし、従つて其の西藏名も世に出でなかつたものと考へられます。然しエヴェレストの正しい西藏名が *The Snow of Bird Land* の意味を有する *Kang Chamolung* である事には疑ひの餘地がないものと確信するものであります。

(以上)

通信

○大塚武君より (四月十二日附 望月宛)

拜啓 十二日朝無事下山致しました。矢張り北の山は雪も多く實に立派でした。天氣は花曇り、雨、快晴烈風、快晴無風、雪で比較的良かつたのですが、九日烈風の中を長ザク南側獨標一九七一尾根より爺岳へ登り、長ザクを下つたのみで、次の日は疲れたし雲行も良くなかつたので寝過して、快晴無風の日をスキー練習と偵察に過しました。この尾根は上部長ザク正面の壁の向つて左端につながるのでありますが、その邊りは傾斜も急でザイルで結んで慎重に登りました。膝がつかへて刻んだステップに足をあげるのも困難でした。この邊りの地圖は随分違つてゐますね。長ザクも

最後の部分が雪庇で、出口が下からはわからなかつたので、この尾根をえらんだわけです。鎌尾根は實に樂な通路です。夏行つてなかつたので鎗へ行けませんでしたが、よい偵察行になりました。寫眞は優秀なつもりです。

敬具

○小林重吉君より (四月十七日附 望月宛)

御手紙有難う。こちらへ來てから何しろ毎日朝は早いし、寮へ歸るご飯をくつてくれるだけで暇がなく、先輩諸氏へも己むを得ず御無沙汰してゐる次第です。今日十七日の日曜も礦業所の連中が別府へ遠足に行くさて、御供をしてきたので、昨夜はシンゲルを騒ぎすぎ、もう歸る時刻になつてゐるやうな有様です。色々の見聞も之からで、そのうち詳しく御手紙しませう。針葉樹會の人々にくれぐれ宜敷く。

○村尾金二君より (四月二十日 望月宛)

毎日忙しいそうですね。物權法の勉強をしてるさ方々から話を聞いてゐます。十八日朝發で新潟に來ました。土樽から石打邊までは一尺許の残雪が一面にありました。

こちらは今がお花見です。二十三日朝歸る豫定です。月末に何處かに行きますか、僕は三十日が休めそうもないので、二十九日か五月一日丈けどちらか一日何處か登り度いと思つてゐます。

此處から飯豊が裾まで白いのが、よく見えます。

○高見要君より (四月廿六日附 増山君宛)

御無汰汰しました、お變りありませんか、こちらは街頭の残雪が消えて既に月餘、しかし市内に屹立する標高千メートルの室蘭岳は今猶上半身眞白、空に春光普きも地に春の訪れは未だしと云

ふきころ。新緑の武蔵野の色を、香を思ひ出します。(後略)。

○和田榮達君より (四月廿六日附 望月宛)

其後如何ですか、小生元氣に勤めてゐます。森脇とは二回程會へました。小谷部にはまだ會ひません。當關西は所謂ハイキングが凄く盛んなのに驚きました。

○松浦靜雄君より (四月廿七日附 望月宛)

前略御無沙汰御許し下さい。小生足の方は三月末よりやつと歩く事が出来ました。(編註、同君今冬スキーにて足を捻挫せしを云ふ。)四月十日より出張致し廿三日歸京しましたので、廿二日の例会も又々失禮してしまひました。人員不足にて又明日より東北の旅(約十日間)へ出かけねばなりません。歸京後は非お目にかゝりたいと思つて居ります。(後略)

山 岳 部 報 告 (二月・三月・四月)

記 録

(1)野澤スキー行(二、九一二、一一)小谷部 小林 他一名

(2)野澤スキー行(三、六一三、九)原 他一名
八日に毛無山を往復した。

(3)八ヶ岳合宿(三、六一三、一三)望月 大塚 里見 木島 高橋
宮城 山田

八日に全員阿彌陀岳登頂、九日は二パーティに分れて、赤岳直下岩稜と碓黄岳、横岳に登り、十二日にも同様にして横岳西壁と赤岳に登つた。一般に天候も良く、豫定の計畫を首尾よく行ひ得た。

(4)奥又白より前穂高東壁登攀(三、一〇一三、二〇)森川 佐々木

船本(但し森川は十四日出發)

十四日に奥穂の途中迄往復。十六日佐々木調子悪く下山。森川船本奥又白池に登り雪洞泊。十七日早朝雪洞發、前穂高東面のフェース登攀、最困難部を突破せるも意外に時間を要したため前穂頂上約七十米下よりトラヴァースして翌十八日午前二時雪洞へ戻る。十八日休養。小谷部十六日に東京を出で、徳澤を経て雪洞に来る。十九日森川、船本の凍傷烈しく、小谷部附添ひ徳澤に下る。(凍傷については後述参照)二十日森川、船本下山。

(5)奥穂高岳(三、一七一三、二二)小谷部

奥又白池往復の後、二十日に涸澤より奥穂直下のルンゼを経て登頂。

(6)鳥海山(三、一二一三、二四)原 岩崎

十四日快晴に恵まれ新山の山頂に立つ。三度來て始めての登頂だ。天幕地迄荷上げしたが、岩崎が風邪を引いた爲め露營は行へなかつた。

(7)八方尾根・五龍岳(三、一四一三、一七)木島 高橋 山田

凄く快晴の續いた時に際會したので、順調に五龍岳の頂上に立ち得た。十五日に唐松に登り、十六日五龍岳を往復し、翌日下山する迄皆な晴天だった。

(8)野澤温泉(三、一六一三、二二)鷺崎

二十日と二十一日、中川、増山兩先輩と一緒に滑った。

(9)爺岳(四、六一四、一一)大塚 山田

概要は前掲大塚君よりの手紙参照のこと。

本年三月中旬前穂高東壁を試みし森川、船本兩君が冒かされた凍傷につき左に概略御報告致します。兩君は十七日午前三時奥又白池の雪洞發、前穂東壁の文字通りダイレクトルートを選んで登り、殆ど全部に近きを登つたが、時間不足の爲明神寄りにトラバースして、十八日午前二時雪洞に歸着した。前穂東壁は當山岳部に於て既に夏秋冬の三季に亘り隅なく偵察を完了し、此度前後二十四時間に近い激烈なアルバイトを以て、ほど登り得たことは兩君の努力を多させればならないが、其の結果恐るべき凍傷に冒かされたことは甚だ遺憾である。今凍傷の原因をごく簡単に考へてみるに、裝備の點に於て種々缺陷ありしこと（例へば替への手袋の不足、ウインドローザーをはかざりしこと、靴の塗油不完全なりしこと）、前日の疲勞（即ち十六日に奥又白池に來て雪洞を作り就寝せるのが午後十一時）の全快せざりしこと、一日にて登らんとした無理のあつたこと、等であり、全體としてみれば非常に無理の多かつたことであらう。凍傷は森川君は右手五指、兩足五指を冒かされ、三月廿三日より築地林病院にて加療中なるも、過搬途に右足五指共殆ど附根より切斷、又船本君は兩手足の指全部を冒かされ、廿二日より中野井上病院に入院、右手薬指第一關節より及右足五指共第二關節附近より切斷の止むなきに至つた。當分入院の豫定である。

又去冬奥又白にて負傷左腕を骨折し、神田名倉病院に入院中の日江井君も、手術の結果良好にて近く退院が出来ると思ふ。

再三のアクシデントに際し會員諸氏に多大の御迷惑を御かけしたことを御詫びし、呉々も今後の自重を誓ふものである。（五・五）

消 息

小川竹夫君 神奈川縣逗子町逗子九一九番地へ轉居。

渡邊九郎君 神奈川縣大船町梅田四五〇の二へ轉居。

大塚 武君（現役） 杉並區荻窪四の七五 石津よし方へ轉居。

定例集會 四月廿二日（金） 於如水會館

出席者 會員）奥野 中川 吉澤 久保田 手塚 吉澤松 増

山 清水 鈴木 小柳 新羅 望月（部員）佐々木 岩崎 原

久々に上京された奥野綱重氏を圍むで楽しき一夕を過した。先

づクマさんより諸會員の近況を傳へ、次いで奥野氏より北海道

の山、スキー、高山植物のこと等のお話があつた。今冬は十勝

岳を目指して吹上へ這入られた等、意氣現役を凌ぐ感があつた。

後奥又白谷に於るアクシデントの概要の説明がなされ盛會裡に

閉會。

編輯幹事を辭して

一年間編輯の仕事をやリ今度望月君に引繼いで一應私の御役も

解放されました。會報發行に就いては中川・増山兩氏の御盡力

に負ふこと大、且又諸兄に原稿催促で御苦勞を願ひ、無事一年

を通過した次第です。事務引受の節に増山さんが申された事は

小生の一年では果すことが出來ず、望月君に引渡すの外はあり

ません。則ち餘り筆不精にならずに時には會報に新しい顔を出

して戴き度いものだと言ふことです。從來餘り筆を執られない

人も會の憲法のまゝに思ふ存分の事を吐き出して呉れたら――

これが編輯者としての最初の希望であり、又現に小生の持つ希

望なのであります。（柿原記）